

## 家康の死をきっかけに町が発展

皆川広照は1591年ごろに、それまでの皆川城から今の栃木市城内町の栃木城に本拠を移し、城下町の整備も進められました。現在の栃木市の基礎となる「栃木町」の誕生です。ところが1609年、江戸幕府により広照の領地が失われ、栃木城は皆川氏の本拠となつてからわずか20年たらずで

なくなつてしまいました。

しかし栃木町は、徳川家康の死をきっかけに大きく発展します。家康が日光山にまつられることになったからです。家康をまつる東照宮の建造や法要に必要な物資は、江戸から渡良瀬川、巴波川などの「舟運」で運び、栃木町で荷下ろしされました。また東照宮完成後には、京都の朝廷から東照宮へつかわされた使者が通る「日光例幣使道」も整備され、栃木町はその重要な宿場として栄えました。このようにして栃木町は「舟運」と「日光例幣使道」により交通の要所として発展していきました。



▲今も残る栃木城の堀



## 幕末の動乱を商人の知恵で乗り切る

1853年の黒船来航を皮切りに、日本には数多くの外国船がおし寄せます。開国して貿易が始まると、物価の高とうや品不足で人々の生活は苦しくなり、全国で一揆や打ちこわしが発生。社会は混乱し、天皇を尊び、外国勢力を追いはらおうとする運動（尊王攘夷運動）も起き、1867年に將軍徳川慶喜が政権を朝廷に返します。260年以上も続いた江戸幕府が終わりました。幕末の混乱期には栃木町も打ちこわしにおそわれそうになったものの、米や金銭などをあたえることでたくみに回避しました。

... Column 教えて！とち介 ...



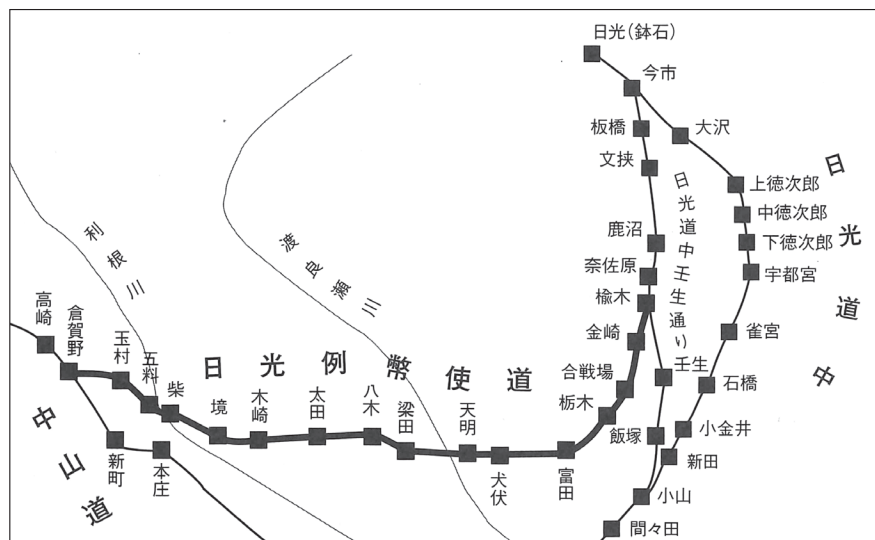
## 幕末の栃木町で大きな戦いや事件はあったの？

1864年に「天狗党の乱」がありました。

尊王攘夷を求めて戦いを起こした天狗党という一団が、資金集めのために金崎・合戦場を通過して栃木町におし寄せました。さわざをおそれた商人たちがお金をわたしたものの、天狗党は松明に火を点けて町の家々に投げ込みました。町は大火事になり、237軒もの家が焼けました。これを栃木町では「愿蔵火事」と言い伝えています。この火事もふくめて栃木町は江戸時代末期に4回もの大火があったことから、それを教訓に土蔵造りの建物が増えたともいわれています。



▲かつての巴波川の様子 (片岡写真館蔵)



▲日光例幣使道とその周辺の街道  
(栃木県教育委員会2011『栃木県歴史の道調査報告書第二集』より一部改変)

江戸時代の土蔵建築で今も残る善野家土蔵

